

巻 頭 言

林 もも子

2022年は戦争の足音が聞こえる一年だった。日常を支えてくれると思いついていた社会の脆さを垣間見る時、人は不安をつのらせる。足元が崩れそうな不安を感じる時に人を支えるのは人であり、身近に支えてくれる人がいなければ、あるいは、身近な人々との間で葛藤を抱えてむしろ傷つけられて孤独を感じる人は、インターネットやテレビや活字など、さまざまなメディアから流れてくる人の言葉にすぎるといえる。

身近な人とは文字通り、身、身体が近い人であり、時間と空間を共有する場の中で声を聴き、目をみかわし、息遣いを感じ、空気の流れを共に動かす人である。よかれあしかれ、そういう身近な人との間では、言葉のやりとりやしぐさの交流を通じて、人は自分が何者であり、何を感じ、考え、何を望み、どこに進んでいるのかを絶えず確認しながら、あるいは変化させながら生きている。そういう身近な人との場がうまく機能しない時に、多少なりともその身近な場を補完したり、間接的に調整したりすることも心理臨床家の役割の一つなのではないだろうか。本号の二つの論文は、人と人とのやりとりの質を研究しているという意味で興味深い。

一方、現代日本に生きる人は、身近ではないメディア、すなわち媒介を通じて伝わってくる人の言葉に深く影響されてもいる。身近な人との関わりがとぼしかったり、希薄だったり、避けたいようなつらい性質を帯びたものだったりする人の中には、メディアを通じて接する人の言葉にかなり大きく頼っている人もいる。特にインターネットやスマートフォンなどの発達により、メディアが多様化し、メディアを通じて赤の他人どうしがやりとりをする機会も爆発的に増えた。その中で、流れてくる情報を身近な人との間で吟味する機会が少ない人は流言飛語の類に押し流されることも多いようである。動画配信などでは動画の中の人々が直接自分に語りかけてくるような錯覚をもたらしたり、繰り返し視聴したりすることができるため、受け取る人はあたかもメディアの向こう側の発信者が身近に感じるように感じて一方的に信頼感を高め、強く影響されることもあるだろう。そこには生身の人間どうしのフィードバックが欠如していることによる、言葉の現実の事実との乖離の危うさがある。再生回数を伸ばす人やいいねをたくさん押される人は「巧言令色鮮し仁」の人だったり、「エンタメ」として消費されるような、薄い、あるいは軽い、あるいは刺激的な言葉を使う人だったりするようである。さらに、そのような信頼性に乏しいかもしれない言葉に流された人どうしが吹き寄せられて新たなコミュニティが生じる時には、そこに新たな「現実」が出現し、別の種類の言葉に流された人どうしのコミュニティとは異なる「現実」が林立することになる。Post truthの時代と言われる中で、心理臨床家とクライアントは同じ前提に立たずに話し合っている可能性もあるのではないだろうか。

心理臨床家は、目の前のクライアントがどういうメディアに接してどういう人のどういう言葉に影響されているのかを全て知ることはできない。それはインターネットが出現する前も同様であり、クライアントの思いや感じの背景を丁寧に聞き取っていく作業はいつの時代も大切である。しかし、メディアもSNSなどのコミュニケーション・ツールも加速度的に進化していく中で、情報環境についての情報を集めることはなかなか息が切れる作業である。心理臨床家の学ぶべきことはますます増えていると感じるこの頃である。しかし、不安の時代だからこそ、心理臨床家は粘り強く時代の流れを追いつつも流れまいと踏みとどまる必要があるだろう。